

キジハタを増やす！

～技術開発の現状と課題～

研究員 町 敬介 （水産研究所）

1. 背景・ねらい

キジハタは、秋に沿岸域で漁獲される高級魚であることから、漁業者からの種苗放流による資源増大の要望が強い魚種です。

そこで、放流用種苗の安定的な量産を図るため、1日100万粒規模の浮上卵（種苗生産に使える良質な卵）を確保するための技術と種苗生産時の生残率を10%以上にする量産技術の開発を目的に、適切な親魚や仔稚魚の飼育技術について検討を行いました。

2. 成果の概要

1) 浮上卵の安定確保

①平成24年度までの採卵では、浮上卵の割合は10%程度で、良質な卵の確保には至りませんでした。

②25年度からは、雄の尾数を増やし、餌を生餌からモイストマッシュに変更した他、親魚水槽の仕様を変更し、採卵方法等の改良にも努めました。その結果、浮上卵の割合は平均46.3%にまで向上し、浮上卵が100万粒以上採れた日は、延11日も見られました。

2) 種苗の量産技術の開発

③24年度の種苗生産では、59尾しか生産できませんでした。仔魚の主なへい死原因は、水槽内の水流が弱いことによる沈降、エアアの衝撃等の物理的要因等が考えられ、これらによりふ化後10日までの飼育初期に70%以上がへい死しました。

④25年度以降の種苗生産では、飼育初期の大量へい死の抑制を目的に、エアアで水を循環させる方法から、クロマグロやスジアラの種苗生産で実績のある底注水方式を応用して生産を行いました。その結果、25年度はふ化仔魚約554千尾から約83千尾を生産し、26年度においても419千粒の浮上卵から、約51千尾の稚魚の生産に成功しました。

3. 成果の活用面・留意点

25年度及び26年度の生産成績は、他のキジハタ種苗生産機関に劣らないものであり、来年度以降も同様の水準で生産することにより、安定的な量産技術を確立します。

また、本生産で得られた種苗は、10月上旬に標識を施し、黒部市地先に25年度は約36千尾、26年度は約30千尾を試験放流しました。

今後は、量産技術の確立を目指しつつ、生産した種苗の放流を継続するとともに、市場での再捕状況を調査することによって、再捕魚の混入率や回収率等を明らかにし、放流効果について検討していきます。

研究成果の概念図

キジハタ



沿岸域で漁獲される美味しい高級魚

→ 秋季の重要な漁獲対象種

↓
種苗放流による資源の維持・増大の要望

キジハタの種苗生産安定化技術の開発

- ・生産に必要な浮上卵の確保
- ・稚魚に育つまでの生残率10%以上

これまでの成果の概要

H23年度・・・1t水槽による生産

→ 7日以内に弊死

H24年度・・・7t水槽などによる生産

→ 59尾生残(約50mm:70日齢)

H25、26年度・・・5t水槽などによる生産
(新施設)

→ 黒部市地先に30千尾強
(約70mm)を標識放流

- ・100万粒規模の浮上卵を確保
- ・平均生残率10%以上を達成

試験放流の様子



来年度以降の計画

①生産試験:浮上卵の安定的確保、生残率10%以上の技術の確立

- ・種苗の生残率の安定化(→標識放流用種苗の確保)

→ 浮上・沈降死等の防止、餌料環境の改善

- ・健苗の生産

→ 形態異常の防除等の検討

②標識放流の実施

③市場調査の実施

- ・キジハタの漁獲実態を解明
- ・放流魚の再捕調査

↓
放流効果の推定

↓
事業化の検討